

正校

七部集

乾



八雲龍守
校訂
一葉舎仙鳧

校
正
七部集

東昌軒藏板

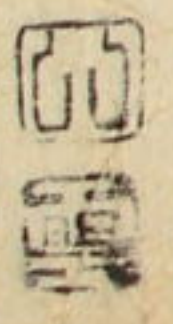
凡例



一世は御借りのうしむる中ふこのなるの美
芭蕉翁正風の一道と世ふひりめんとむとの小
門人の誰と多とそくはくして撰集なりとるもの
祖翁のふりやをそのとんとする者へかれしを
まへと書こむるも今流布の印本らとと粗漏は
て書字の誤多くこむる為ふり意きこころれ
と抱く老ましくれうらまをよるこころい元祿の古板とい
とさらし真蹟及び法集と参考し決家の高説よ
りて悉く誤とこむる故本校正七部集といふ
一假字つらひに古字に因てこむるこころいとも俗談便
言ふいりてこむるこころいれくそ音の近きよと
一特題のたぐひに元祿の古板といふと誤字の
あはれ本書に就て正ま

一校正つらひをばはれらとも猶誤ありはなり草庵と
抑てとくあへ速小改正もるる意いかにのこりぬ
幸幸亥孟春あはれは大成のものと申稿の
〇

東昌軒藏板



乾の巻

春の日

初丁より六丁迄

春の日

七丁より十二丁迄

ひさこ

十三丁より十八丁迄

猿蓑

十九丁より廿三丁迄

續猿蓑

廿四丁より廿七丁迄

坤の巻

阿羅野

廿八丁より三十一丁迄

炭俵

三十二丁より三十三丁迄

春の日

晴んとして入りの産物あり
熱田のうらふゆめぬ後一舟は
しつとゆは並程のこもるやう
ていばさうなり重五うねおらる
竹藩をもちこしつとゆめぬの
まじりまじりもいふは

二月十八日

荷兮

まじりまじりまじりの産物あり

重五

ゆめぬ後一舟は

西桐

しつとゆは並程のこもるやう

李凡

ていばさうなり重五うねおらる

昌圭

竹藩をもちこしつとゆめぬの

執筆

まじりまじりまじりの産物あり

重五

ゆめぬ後一舟は

荷兮

しつとゆは並程のこもるやう

李凡

雨の粟の角のよき草
 傾城乳をのくまを晨
 霧らうらう人のかうへ
 りゆくくまを神興く
 ち居より半道奥の砂行
 花ふき男の糸帯あつた
 柳あつた陰をまわらふ
 入るるりくまをさう
 らのりくまをさうさ
 うの情く梓きくあ
 馬あつたをさうさ切
 いもくまをさうさ位
 松のあつたをさうさ
 ちくまをさうさ返
 朝顔豆腐とさうさ
 念佛さうさ秋あつた
 穂養生ふ藏とさうさ

兩桐 荷兮 昌圭 重五 李凡 荷兮 兩桐 昌圭 重五 李凡 重五

雨の粟の角のよき草
 傾城乳をのくまを晨
 霧らうらう人のかうへ
 りゆくくまを神興く
 ち居より半道奥の砂行
 花ふき男の糸帯あつた
 柳あつた陰をまわらふ
 入るるりくまをさう
 らのりくまをさうさ
 うの情く梓きくあ
 馬あつたをさうさ切
 いもくまをさうさ位
 松のあつたをさうさ
 ちくまをさうさ返
 朝顔豆腐とさうさ
 念佛さうさ秋あつた
 穂養生ふ藏とさうさ

荷兮 李凡 兩桐 昌圭 重五 兩桐 昌圭 重五 李凡

三月六日野水亭ふく

さらばや柳うらうの八重
 おりくまをさうさ
 まの結帯供あつた
 松風ふたつたをさう
 賣のさうさ
 さらばや太秦

且 藁 野水 荷兮 越人 羽笠 執筆 野水

兼あるはくしよのまをく
 若町中川をく二人發刺ん
 先のり車申くはち
 能負く大津の湯ふつた
 何やらさん永中のま
 眩るあゝとをうとがさうて
 羨ふじふま万日のまら
 里人小麓とわとを秋の西
 舟なきはくり車石おく格
 ありんるあの花の能るん
 視るきるさるの湯の山
 のくも花冠の使浮勢の常
 内侍のそらふ代くの眉の園
 おおの軍の甲と斤わさう
 やとくも栗と都やとけ
 大年の念佛とさうさへも柳
 わとと無我うよと隣あも
 胡夕のまをくくも拘杞うもく

且 蕞
 越 人
 荷 兮
 且 蕞
 野 水
 羽 兮
 越 人
 荷 兮
 且 蕞
 野 水
 羽 兮
 越 人
 荷 兮

多古少古日とやきまの粉
 一ぢりる宿とるう寺れまや
 こく魂まのるきあつたの母
 陽炎のまをくくもまゆふて
 まる神くは奇いさく
 田と持くさるるまあまたり
 力の節とつき一申の子
 漣や三井の末寺の次とりふ
 言ひくくもそをのふく
 又つまうり十九日の月さむき
 君の片とまふふみとけ

羽 笠
 野 水
 且 蕞
 越 人
 荷 兮
 羽 笠
 野 水
 且 蕞
 越 人
 荷 兮
 羽 笠

三月十六日且葉う田家あをゆり

蛙はくすく甲くき森さうれ
 船くあくもさるめのとく
 蕞烹る岩木の身と宿りりく
 まくく人とくも馬の子
 三くのも霞一の舟の月れく

野 水
 且 蕞
 越 人
 荷 兮
 冬 文

芦の穂を揺る 傘の端 執筆
 穢きもふ穂塵鬼の傍の集うて 且 菖
 若のあはより 花 又申る里 野 水
 るの口と 籠燈や 人 燈の川 荷 兮
 ひるるささゆり 花の 一ぼり 越 人
 ぬよる 指さす 花の 燈の 野 水
 解てや おうん 枝むき 冬 文
 今宵は 文 兮 兮 兮 兮 兮

同十九日荷兮室々々々

秋の和名 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 柳丁の声 ふいふ 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 別の月 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 仍そ花 四のふより 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 まゆり 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 水さりや 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 美のふ草 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 拓路 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 野 水 越 人 荷 兮 野 水 且 菖 冬 文 荷 兮 野 水 越 人 荷 兮 野 水

連ぶりの 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 流 垂る 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 岩若 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 ひとほり 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 蓮二 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 胡 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 甚 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 花の 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 も 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 あら 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 花 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 深 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 山 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
 荷 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮

追加

三月十九日舟泉亭

山吹のあつれを 廻のつれか 越 人

ほろろききそその心まの尾はち〜 九白
 歌はさゆれと燈くめり秋は 李凡
 かつとも板屋の脊骨をの一里塚 越人
 られ〜こいまうらなれ梅の一口小 杜國
 長所のうらうら〜く〜く〜産の卵 龜洞
 命と〜ま〜で〜管〜る〜板〜の〜な 舟泉

武蔵坊とくわらぬ

ま〜うけや〜て〜中〜く〜る〜の〜多〜川 商露

老聃曰知足之足常足

馬〜く〜く〜や〜れ〜り〜り〜の〜多〜の〜月 聽雪

老聃曰知足之足常足

夕〜り〜小〜新〜娘〜あ〜つ〜き〜ま〜を〜金〜小 越人
 帯〜小〜の〜塚〜雨〜こ〜り〜れ〜く〜つ〜路〜小 柳雨
 は〜き〜ま〜ふ〜ふ〜あ〜う〜む〜り〜中〜小〜寄〜あ〜たり 塵交
 昔〜昔〜ハ〜池〜か〜異〜さ〜て〜花〜の〜ゆ〜り 荷兮
 昔〜池〜の〜ふ〜ろ〜こ〜と〜は〜ろ〜く〜は〜ま〜ま〜小 全
 吃〜の〜夏〜陰〜茶〜屋〜の〜遠〜さ〜く〜如 昌圭
 夏〜川〜の〜き〜ふ〜寄〜の〜る〜も〜多〜は〜小 重五

譬喻品三界無安猶如火宅

とら〜の〜心〜を〜

六月の汗の〜居る〜其の〜如 越人

秋

昔〜の〜細〜ま〜さ〜い〜ま〜を〜と〜は〜く〜後 且藁

貧家のむすぶ

か〜ま〜ね〜く〜〜む〜く〜ゆ〜あ〜く〜う〜如 越人
 な〜き〜〜〜〜〜ま〜〜〜〜〜一〜掃〜入〜ま〜〜〜お〜か 雨桐
 そ〜ろ〜く〜人〜を〜お〜ま〜む〜〜〜〜〜〜 芭蕉
 山寺〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 越人
 毛〜く〜ふ〜か〜西〜白〜や〜秋〜の〜月 野水
 八島と〜か〜か〜る〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 全

待恋

具〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 全

閑居増意

秋〜の〜り〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 全
 胡〜白〜の〜ま〜ま〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 舟泉

らうたきふ初らむ娘くくくして
燈籠くくくくくくくくくくくく
つゆ秋のきまふ力と探をまに
あまきくくくくくくくくくく
初月夜双六くくくくくくくく
あつた買みちふほくくくくく
今宵のきくくくくくくくく
まうたきくくくくくくくく
佛舎くくくくくくくくく
縣あるくくくくくくくく
五形 草の 畠 六 反
うまーくくくくくくくく
まきくのるのゆくくくく
くくくくくくくくくく
庭のくくくくくくくく
控ーあまきくくくくく
悔りとくくくくくく

重五 杜園 芭蕉 野水 荷分 重五 芭蕉 杜園 野水 荷分 重五 芭蕉 杜園 野水 荷分 重五

雪の狂異の園のまめくくく
御くくくくくくくく
あこくとくくくくくく
芥子のくくくくくく
三日月のくくくくく
帰湖のくくくくく
まきくくくくく
あまきくくくく
うけくくくくく
おのくくくくく
あつた買みちふほくく
くくくくくくく

荷分 芭蕉 重五 野水 荷分 杜園 野水 芭蕉 杜園 野水 荷分 芭蕉 杜園 野水 荷分 芭蕉

たふは降ふあー火焼く
さーまーれと

炭くくくくく
ひのくくくくく
た蘇る骨のくくく

重五 荷分 杜園

鶴つるさちとの月うらるあり
う勢吹ぬ社の日籠ふ酒れきり
菰織るまをと市ふ振まきり
かき茂川や胡麻千代あつぬきり
わささの舞なる川うらのころ
おのふこと布撫寄あやこられて
くまいたさこちと戯る三平ハルカホ
たられてくらあやう聖の離れきり
火あぬ巨燈ふと人とえん
門さのまゆふ帝子うらて藤の
血刀うらぬ月の啼きさう
旁りりく本所の侍さつき
ふあまつ細きうらうらうら
まねお匠板の敷とまをさうら
僧もののをけ敷きと香
白燕ふるあぬあうねとほい
宜あうらうら 叙と築る
八十年とこの日なる童母あうら

野水 芭蕉 羽笠 荷兮 重五 野水 杜園 荷兮 重五 野水 芭蕉 羽笠 荷兮 重五 野水

なごころをさむるセメのつま
西南小柱の影の川をむとた
蘭のあやうらうトホう川香
縁のあふ賢なる女えそらう
舟籠う粟とあらう日のくれ
まやまうけさうらうら西月ふ
つみまうらう 糸まの文
寅の日は具と雁治の急紀と
そらあうらうき 南系の比ウチ
わささして誰ともさぬ人の像
泥あうらうのまらた芥の根
粥まうらうらうらふかどまう
持まのトう 澄入らうら
少けうらうらう 薫ゆやうら
はらぬあまをさうらうら

杜園 羽笠 芭蕉 荷兮 重五 野水 杜園 荷兮 重五 野水 芭蕉 羽笠 荷兮 重五 野水

田家眺望

まゆふや鶴の影くあらひあて

荷兮

○冬の日

その朝日のあそびありけりし
櫻橋山家の侍をよき人
ひきまきりし雨の降とあれは
音りれき具さる月あくと
初なる童蘭切りいいて
秋のころ橋の山連歌のりふ
所くそわくし富さる寺
寂しくは枝の花の落る音
まよふ糸路とさむる風の長
縮進小鳥帽子の女ふ二十
春くあそびゆるらひの落る
あめふりさし山福くはく
麻のりとりふ家の葉あむ
いとくし指楽者と世と接く
あめあそびあはれあなる
まよふ糸路とさむる風の長
河津の山あふ
貴とそくすし雨とそくすり

芭蕉 重五 杜園 羽笠 芭蕉 野水 羽笠 重五 杜園 荷兮 芭蕉 野水 羽笠 重五 杜園 芭蕉 野水 羽笠 芭蕉

と食の暮とりらふあはれ
流のくふ屋を引廻と拾ひ
唐草くし進むふれみくま
てに思ふ年は小角屋のむかし
芭蕉をよきうに美園はくし
芥子あまはれ中坊よりふすむれて
とくそまののみまきりて
志のくまふ風巻のそくまのあ
あおくまの風巻のそくまのあ
初橋くし屋根あれくまのあ
夏草くまのあ
之政のまの杖も破あなる
伏し本情の降とれとくは
りくまのあ
まのまのあ
の干とあまのあ
山あ花あ

荷兮 杜園 重五 野水 羽笠 重五 杜園 芭蕉 野水 羽笠 重五 杜園 荷兮 芭蕉 野水 羽笠 重五 杜園 芭蕉 野水 羽笠

追加

つのふえりもや羅面ししとつる夏
 荷分
 行ちああつるのねらうの雲
 重五
 〴〵と芥りもふふとまきして
 杜國
 橋まきりまきとや川を朝な
 芭蕉
 浪りし船のまじ月を海
 芭蕉
 ひくくふ橋とまきつた後阜山
 芭蕉
 水

ひさこ

江南の珠碩あつりひさこを送れりこれい
 是の將也とむつ酒とあつちむ器も
 あつり或はち大樽ふ造りてくは細をわ
 れとつるふくも異なり古まて後
 の恵あつて用ふもをこしつらふ
 清くくせうはほつり小睡りあや
 てはうちふ漏る酔もふ日月陽秋
 きらりつらつて雲のあけの園の
 郭ももつけつるこねくちふを
 念くともるえきもつて皆風雅の
 薄思とつるもあつて是はいつらん
 中らあつてつる乾坤のあつるも
 出くはつるこつる毎日はつるも
 つる

元禄三六月

越智 越人

花見

木ののこふけを給も様うね
 西日北とくふよとそと天をあり
 旅人の風うきゆくまをれて
 ちきしおをぬを刀の 替
 月待つ假の間裏の月石
 ね向つくる ねりまやま
 鞍垂る三嵐駒ふ社のまて
 名いさましく 小浮登る 雨
 入つた強討の涌湯のうもき
 中あそびおんのをさこ山伏
 りふるを唯つ方へあつて
 ちきとておゆらうきつりり
 物ありふりありの喰をせうて
 月える春の神をさして
 秋風の舟とそをさる波の音
 唇ゆくくくや白子よあ費
 多能談茶のさうりのて田

公羽

曲珍

水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁

順後みあれ道のうけり
 何より色地の花をあをれある
 又ちほよあまのうきさ
 羅くし見をいそとてあか
 然りそとととととととととと
 多あう紀の園をさる
 酒をさけさるあさう
 双六の目を祝うまをさる
 假の持佛さるむのふ念佛
 中さふちるふ居まの春のね
 月あまの里のなうとものね
 情れくくくぬ確の行と美
 月ねくくくくくくくくく
 花まきとあまのねらうら
 唯四方なる草庵は
 一貫の海むつとくくくく
 醫者のくくくくくくくく
 ささけをさるあをんと欠廻

水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁

○らん

蛇うりけくうまの山中 碩

翁主 珍碩主 曲水主

ひんぐのまむしうや春のま
うたれて蛇のまいとえぬふ
蝙蝠のほくふつらさくして
空のうらむぬ津城より
はるばるのまとうまはふるま
秋の色あつて風うらむら
こころれくハあふおわのけ
うつりまのぬ城と青ふらま
ゆさうらう市のうらまは
鏡泊のちひさくくゆる川の
念佛くくとうむくくつき
うらうらうまはうまはうま
居居の甲うたわうやまこれ

珍碩

路翁

全碩 全通 全碩 全通 全碩 全通

聴きとまき人の廻つき
花いあついよ月と夜
まふめさげ極の下と和自あり
ま調あつる浦のまう那
は村の産まふ野舎のありあ
とろまんおけたわのまうといふ
くまうまの世と運産いとんま
まこほむは酒のさまきこた
なうあやる秋の夕そくひま
あうままの山の中
うらうらうのまの月の影
まのまのまのまの裸む
恥しやまのまことま
文珠のまのまのまのまの
ちりれ加減又といひまのま
ゆらやせぬまのまのまの
まのまのまのまのまの
まのまのまのまのまの

越荷

全碩 全通 全碩 全通 全碩 全通

汗の香をかきく衣をとりけし
とくりよるもさうあけてふる
花さうり又百人の指さす
まの腕もとあつてさる

人今今

珍碩九翁一路通八荷兮十
越人八

城下

鉄炮の音をよるや丹波
砂の少麦の穂くちらく
る風ふすすやの小貝拾をせく
なまある一川湖エラふくひり
基のさうひ二人志くさる有能ふ
秋の秋麦の穂まうのこる
女帯花ふ細糸ふあそられて
目の中おのくくをさうちある
さうり又川東ゆきとく向かえ
新のさうりさすれつさうり

野經

野經 泥土 里東 野經 珍碩 怒誰 乙州 泥土 里東 野經 泥土

馬お百部を後をさうやさく
一里さうり山の下の芥
足知くきてさすふさもあられを
おれ世になさくあつてくれと
さすふさ越の柱のささうふ
さすふつれく丁百の砂
月さすふさ屋をさうりさうりせ
羨志めの陸のさうりさすふ
さすふさ付てれおさすれす
半氣遠の坊さ法出を
のみさり居居の差のさうり
さすささうりちのゆる湯食
さすさうり百部さす馬帽子あそ
配所をさすさ供所の蛤
さすさうりさ出果の法やん
連と力とされ舞殿なう
か風の大聖寺繩を吹遠
貴のさうりさ用叶へさ

乙州 怒誰 泥土 里東 野經 乙州 珍碩 里東 怒誰 乙州 野經 泥土 里東 野經 乙州

○ひさこ

糊剛き夜急ふちひさき法有て
 けふくの舟ふ菜食喫出た
 看徑の樂ふ浦きく呼吸あり
 四十八老のうつくしき
 髪くせふ枕の跡を藤巻し
 醉と細目くあらく吹く
 杉村の花はまよふ面うつそ
 田の斤濁り苗のとりさ

泥土 怒誰 里東 乙州 野經 怒誰 泥土

野經六里東六泥土六乙州六
 怒誰六珙碩五筆一

雜

龜の甲亨らるる時を啼かせ
 唯牛糞ふ風のふくき
 百姓の本綿仕舞をみるきて
 小舟をろふるうくうんの縄
 稻をまく奥のるはらさ松の舟
 埜蹄着くきやるはり焼

乙州 珙碩 里東 探志 昌房 正秀

秋萩の清茶ふちうさ防ぎ
 風呂のか城の志のうありり
 筆のまろきあふて啼わ
 きのやうなるかまをこの堂
 土川をふ鏡のまを影をう
 んのそとふ急をあけける
 内巻の香ふ吹をこまひまの奴
 藤くく起くづいさ啼
 後への中巻さけそ月あり
 ちととふ京もあつるやさじ
 昔ふ巻を同の町舎の今年ま
 昔とあふ流のぢくまき
 うす星るりいんうとまて
 汗いんならふあのかうぬる
 法てうそあ孫給の秘をそ色
 探あまされてまきあけか
 吟うふ菜催の下とち甲付
 傳馬と鳴るおまをり口

及有 野經 二嘯 乙州 珙碩 里東 探志 昌房 正秀

〇八三〇

ちとやうく居る禪門の祖又
 本堂いまつて最聖のちうら祖
 羅漢の徒志おつて修んぬ
 蓋と痛人の乃命を修んぬ
 為すことしむまこと應り
 高僧の定ふ紙端と換知こと
 口と果ぬいふさまの時宜
 多わたりよ小刺りある草袴
 秋みおる肥後の態本
 来り海の宮で月見る修若如
 念布子ひく川おきこたり
 泥山く元めくと吃られて
 呼ありけしれ猫の帰らま
 子親水小人所のるあうり
 中ふの楓木の芽の之
 ちるるふき踏りしるるあうり
 山路のる踏ふゆかけらふ

正秀十九 珍碩十七

秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀

猿みの

晋其角序

俳諧の集つて事古今うりやも程さ
 此道は世のく記をき時あねや初
 の身一つてそはむり魂のふれを
 申さるるたぬこころいひるるあうり
 く世うりまうきく人うり何うそ
 不変は変とまむむむ他をりうふ
 及もまふとまむも色とまむもまふ
 かつ彼西のど人の骨うて人を作ら
 ことまふはまむる笛とつてやうふ
 らんゆるとやとれりる人うり成て作ら
 とれ互の志のわが結さるはる魂の法
 けおろそりのふはらやけまはるあうり
 ひのうりまふアイウエオうりまふ
 りうれうんあうりまふあうりあうり
 不魂のうりまふあうりまふあうり
 脚のころうりまふあうりまふあうり

○猿みの

積り小善と云ふは 似流の形と入
 多きしは流所あたりにち 彭高の如く
 ひと叫びてあはれ 小僧のこゝろ
 かりりしと云ふと元一にては集とつら
 として積りしは 小僧のこゝろ
 う序をさすは 魂と云ふを
 去来凡兆の流り 古流のふまゝの流り

吾

初しんを積り小善と云ふは 芭蕉
 あまのけしと時あるおの序の序 其角
 時あるや 並ふと云ふ 千那
 来入り時あるけしと 史草
 流所の形流りしと 正秀
 度流りしと云ふは 史邦
 舟ふまゝの流りしと 尚白

伊賀の流りしと

初しんを積り小善と云ふは 曾良
 あまのけしと時あるおの序の序 元兆
 時あるや 並ふと云ふ 乙州
 来入り時あるけしと 羽紅
 流所の形流りしと 昌房
 度流りしと云ふは 去来
 舟ふまゝの流りしと 野水

○猿の

其角 全 凡 光 芭 蕉 凡 兆
其角の切と接りたり
全 凡 光 芭 蕉 凡 兆
其角の切と接りたり
全 凡 光 芭 蕉 凡 兆

其角 尚 白 珠 碩
其角の切と接りたり
尚 白 珠 碩
其角の切と接りたり
尚 白 珠 碩

霜月朔旦

良 品 不 玉 且 葉 去 未 探 丸 尚 白 龜 翁 凡 兆 芭 蕉 其 角 凡 兆 芥 境 半 殘
良 品 不 玉 且 葉 去 未 探 丸 尚 白 龜 翁 凡 兆 芭 蕉 其 角 凡 兆 芥 境 半 殘
良 品 不 玉 且 葉 去 未 探 丸 尚 白 龜 翁 凡 兆 芭 蕉 其 角 凡 兆 芥 境 半 殘
良 品 不 玉 且 葉 去 未 探 丸 尚 白 龜 翁 凡 兆 芭 蕉 其 角 凡 兆 芥 境 半 殘

貧交

丈 草 曾 良 去 來
丈 草 曾 良 去 來
丈 草 曾 良 去 來
丈 草 曾 良 去 來

振のあし踏はまや漢子も 史邦
 脊門口のつばよのりるもあふ 丈草
 いりまの雪ふよあれて鳴るも 千那
 まゆのやま浦のふらふふ鳴鳥 九兆
 民士のそこの踏や響の中 木節
 のるまのこまの鳥のや響か 文草
 もろもも挿入てあふるまの海 路通
 んまて操あふん響の歌 且葉
 漂きよ音のつたての舟 杉凡
 このゆきや頂のまわてあふ月 其角
 かゝるりの蒲ふまくりやあふの松 暮年
 元中りまの橋ふま〜石敷 山 智月
 記あり略し
 首出てまのまをえんや 竹戸
 歌竹戸の念
 身あひ我子のあそび紙念 曾良
 魚のうけ鶴のゆりせあそび沙汰 探九

まのりまをね海ゆりまを及羽成る 丈草
 行向砂小使を

搦つまふ〜まふりあるまうり 史邦
 後桐のまふのまふりあ〜り 野童
 鶯の橋ふり〜まふりあ〜り 伊賀 蜂木
 呼〜まを胸賣〜まふりあ〜り 九兆
 こゝれ海まやね原のまふりあ〜り 膳天 晝母
 柳まや内ふ原ま〜り九人 其角
 まのりまをね海ゆりまを及羽成る 史邦
 まのりまをね海ゆりまを及羽成る 羽紅
 やま〜まの瓜の粉海ゆりまを及羽成る 探九
 まのりまをね海ゆりまを及羽成る 九兆
 信濃路とつら〜り
 まのりまをね海ゆりまを及羽成る 芭蕉
 善光の原とあけまを尾のま 其角
 音のりまのつら〜り 尾張 羽置

○横の

維長崎とてん 違わうくしきまのこひ 卯七
あつつけくりやまふのくまきこ 去来

青西追悼

乳のころのふせをばしとる解きか 尚白
くく 慈いふく世の癒もきの内 芭蕉
降くまきあそれい 蘇おぬぬのり 乙 芴
一月の我ふまふせ 海くき 文 草

住吉奉納

お祈ふや鼻息白一面の内 其角
弟李信ふ又のまきまきまの丸伊賀 順 琢
あくやくちい中一まきまき 全 祐 甫

乙 芴 新巻少々

くち家と買つせく我ハ羊忠 芭蕉
弱法師 我門の中せ 隆の礼 其角
歳のおや 弟 徳又とまきけら 長和
くち家のつまふあつとりの客 去来
くまきまのり 白のまきけや 経 徳 全
あつとりのまのり 丸くまきま 羽 紅

やうとられて又やとむり ち 栄の書 其角
ソ 松くくと人ふつとわつ 羊の書 路 通
くまきまのり 破れ袴のまきまき 杉 爪

夏

有明の面おとまきまきまき 其角
くまきまきまきまきまき 木 節
あつとりのまきまきまきまき 芭蕉
あつとりのまきまきまきまき 尚 白
あつとりのまきまきまきまき 九 兆
あつとりのまきまきまきまき 智 月
あつとりのまきまきまきまき 史 邦
あつとりのまきまきまきまき 羽 紅
あつとりのまきまきまきまき 文 草
あつとりのまきまきまきまき 去 来
あつとりのまきまきまきまき 奥 芴

○ 蕨の

松竹や竹ふきとりのほろつきは 曹良
うき我とくひのうきせよか人こそ 芭蕉

旅館をせとくをまどとる

さる楓葉のうらふまも一はり 膳所 曲水
四月八日詣慈母墓

そのふらうつらうつるをりか 其角
まうこれぬ花と牡丹の姿え 全峯

別僧

ちんちんこのふあまよりりの花 越人
まあまのあまふらまをけのむ 琢碩

あふけられてまうらうらふ
わらわら

似合もまうりのまをはたて 杜人 杜園
まうまもまも申りけしの花 嵐蘭
井井まもふゆけしは 杜若 半残

起りておふまこれぬ朝の間の
起りのうらうらうらうらうら 仙化

題去来之嵯峨落柿舎三首

豆植る如き生れぬれまふか 元兆
破竹やわさと藤子のあふい道 曾良

南都旅店

誰のまうらうらのぬの園の相 千那
洗濯やまのふゆけし柿の花 尾花 薄芝

豊國ふく

河のまれば力と誰ふくくくくく
とけのまも島岸く悪を帝 去来
たまのまも稚ま時の信のまも 芭蕉
徒ふ鳴うつらうらうらうら 正秀

明石夜泊

諸毒やまうれきまるとまの母 芭蕉
まう代や前庭のまも 拙一 越人

みゆきまうらうらうらうら

石根骨とまうてふらうらうら 其角
穂結ふらうらうらうら 芭蕉
湯原のまもふらうら 解 岩翁
さうらうらうらうら 尚白

○様との

六月廿六日辰辰の遠馬

弟ひく

大坂やえぬよしの夏の六十年 伊賀 蟬吟

奥の細道

夏州や兵たつ夏の跡 芭蕉

這山よかひをうり九境のみ 全

比境をひわらるるわらわら

このゆきや

かこつらう角うらうらけと泣たぬん 全

お月るふあうり控てなれとま 九兆

は秋夏の味たつとやわお月る 木節

ま七の謂は弁ありまつとる 史邦

奥の細道

の塚いのつこやとまはるまはる

一里まをりたりたうの方まはる

そまふあうりまはるまはる

お月るふあうりまはるまはる

まはるまはるまはるまはる 芭蕉

大和紀伊のまはるまはる

はるまはるまはるまはる

つらうまはるまはるまはる

整利やつ後不流くお月雨 去来

りのるや夢傾くお月雨 九兆

望月やまをせてまはるまはる 芭蕉

望月やまをせてまはるまはる 羽紅

七十余の老翁まはるまはる

まはるまはるまはるまはる

けるまの老翁まはるまはる

はらふえまはるまはるまはる

お月るふあうりまはるまはる

まはるまはるまはるまはる

まはるまはるまはるまはる

六月廿六日辰辰の遠馬 其角

百姓もまはるまはるまはる 去来

まはるまはるまはるまはる 正秀

つらうまはるまはるまはる 游力

孫をまはるまはる

○猿の

まき葉のあしこやらん 智月
まき葉のあしこやらん 花紅

まき川の園まき 芭蕉
風流のまきや奥の田越まき 芭蕉

おののまきまきまき 全
眉帯を面影あしこまき粉の花

法隆寺開帳南無佛のまきを拜まき 全
内袴のまきまきまきまき 千那

田の畝のまきまきまき 万乎
膳野曲水まき橋まき 去来

まきまきまきまきまき 去来
勢田のまきまき二句 九兆

まきまきまきまきまき 芭蕉
まきまきまきまきまき 田上尼

三熊野へ清まきまき 尚白
まきまきまきまきまき 半残

まきまきまきまきまき 尚白
まきまきまきまきまき 半残

病後

まきまきまきまきまき 六阪 何処
まきまきまきまきまき 乙刃

まきまきまきまきまき 嵐蘭
まきまきまきまきまき 嵐蘭

まきまきまきまきまき 里東
まきまきまきまきまき 里東

まきまきまきまきまき 里東
まきまきまきまきまき 里東

まきまきまきまきまき 里東
まきまきまきまきまき 里東

まきまきまきまきまき 里東
まきまきまきまきまき 里東

まきまきまきまきまき 里東
まきまきまきまきまき 里東

まきまきまきまきまき 里東
まきまきまきまきまき 里東

まきまきまきまきまき 里東
まきまきまきまきまき 里東

穠きの

素堂之蓮池邊

白五や蓮一枚の枝あこま 嵐 蘭
 日影田代時つゝくあぐ陸 乙 笏
 日の暮さ 鹽の底の蟻カガ 九 兆
 の字も由鼻つさあはに花寄をさ 全
 月のあやころれてそとと牛のそむ 正 秀
 たるあし 藤ふよれハ花の影 木 節
 あぬこの影つて風をあつりし 野 童
 夕ふふりれてつゝとこ江戸 羽 紅
 ころるの端入あつらんら江戸 巴 山
 千子うさまうらうらとまきまの國
 よりきまうらうらとまきまの國
 ちと人の少ゆるも今や土用干 芭 蕉
 の字もやあなまのぬまをそと 嵐 蘭
 ちとくくふねれハ涼き夕一 宗 次
 ちとくくふねれハ涼き夕一 九 兆
 唇うさまうらうらとまきまの國 千 那
 月影や思の歌のうさま 曾 良

あつらふや此並いゝるそとの夢 去 来
 ちとくくふねれハ涼き夕一
 そものこひ今のハ散よ似る物大阪 之 道

秋

秋風やまをちとくくふねれハ涼き夕一 不知 實
 此夕東武よりきまの國と素堂
 初月くるとぬけゆる馬や秋の風 杉 凡
 芭蕉を六のあふれとや秋の風 路 通
 人あはく 藤ももを花の影 珠 碩

旗竿の全昌寺小宿す

旗竿の全昌寺小宿す
 旗夜秋風きくや喜の山 曾 良
 声もや 涼の音ぬおと秋の風 山 川
 りとあや 藤今留の秋の風 九 兆
 大比 殿やまらふゆき葉のそと 野 童
 文月や六日の影のあはれ 芭 蕉

○ 旗竿の

合款のやれまきりしむいんそめ款 芭蕉
 七よおらまうしむうふこらふ一 杜若
 ちりりれれまきりしむうお撲瓦 去来
 ちりりれれまきりしむうのちりり 風来
 葉やあつこの葉のほとくれき 及肩
 ちりりしむうし似るるあ様か 鼠蘭
 ちりりしむうしむうあ様か 杉凡
 ちりりしむうしむうさ様か 千那
 ちりりしむうしむうあ様か 史邦
 ちりりしむうの肉よりおあし 且兼
 秋風やちりりしむうしむう 子尹
 進ぬ子の宛のちりりやまらぬ 羽紅
 八歳おちりりしむうあ様か 紫雲
 又ちりりしむうのよ
 まのこしむう 柄の先のちりりれ 元兆
 つりりしむうしむうあ様か
 つりりしむうしむうあ様か
 まろちりりしむうしむうあ様か 去来

平田 李由
 元禄二年着ふ他をられてしむう

ちりりしむうしむうあ様か 曾良
 桐のあしりりしむうあ様か 芭蕉
 百舌もつちりりしむうあ様か 元兆
 ちりりしむうしむうあ様か 落梧
 ちりりしむうしむうあ様か

病屋のちりりしむうあ様か 芭蕉
 ちりりしむうしむうあ様か 同
 か賀のちりりしむうあ様か
 のちりりしむうしむうあ様か
 ちりりしむうしむうあ様か
 ちりりしむうしむうあ様か

ちりりしむうしむうあ様か 芭蕉
 ちりりしむうしむうあ様か 尚白
 ちりりしむうしむうあ様か

○探しの

なごりや花をよめて写す月夜 風 夢
いせよまらうしりる時

葉月や夫帰ふ後人よん 七人 子
こり月よ か 蕪のあまきさうりる 之 道

粟稗と月如るあつぬも月夜 半 残
月をせん伏元の城の枝 郭 去 来

翁と芽をよる 伊賀
おのろり 伊賀 花をよるえよ月夜 士 芳

加茂月夜 かのみづきよ かみづきのたねのたね
おのろり かみづきのたねのたね 花をよるえよ月夜

月夜や栢より 伊賀 猿のこ 史 邦
友達の古傳ふり 伊賀 りる

おのろり 伊賀 花をよるえよ月夜 車 袋
おのろり 伊賀 花をよるえよ月夜 乙 洲

糸雨空まきの月と人傍仲間 文 草
吹風のおもや 伊賀 月一川 元 兆
おのろり 伊賀 花をよるえよ月夜 尚 白

向のよき 伊賀 花をよるえよ月夜 那 曾 良
元禄二年つら 伊賀 花をよるえよ月夜

そそ 伊賀 花をよるえよ月夜 芭 蕉
古例と 伊賀 花をよるえよ月夜

月夜 伊賀 花をよるえよ月夜 芭 蕉
仲秋の望猶子と送 伊賀 来

おのろり 伊賀 花をよるえよ月夜 去 来
おのろり 伊賀 花をよるえよ月夜 昌 房

おのろり 伊賀 花をよるえよ月夜 羽 紅
おのろり 伊賀 花をよるえよ月夜 尚 白

おのろり 伊賀 花をよるえよ月夜 元 兆
おのろり 伊賀 花をよるえよ月夜 去 来

おのろり 伊賀 花をよるえよ月夜 越 人
おのろり 伊賀 花をよるえよ月夜 正 秀

おのろり 伊賀 花をよるえよ月夜 一 鳥 不 鳴 山 更 幽
おのろり 伊賀 花をよるえよ月夜 元 兆

○猿の

物の言 伊賀 花をよるえよ月夜 元 兆
おのろり 伊賀 花をよるえよ月夜 曾 良

旅籠のつと合新の下 江戸 千里

崎崎や浮舟木の蒼麦畑 珎碩

よりのとむるそや秋の天 九兆

競つるはと者く競つり 半残

田舎間のうすきうきく葉の高 尚白

葉をわむ跡まらふれあうたり 其角

さきまふ小鷗の鳴りやをまらえ 珎碩

くたけのわたりくか稲の秋 土芳

稲うつく舞あふむくさふね 九兆

自題落柿舎

竹めりや枝くちうさくし山 かみふ松 去来

あゝ風竹ゆくく梅の下あま かみふ松 盛生

眺まきく竹切山のうすくはま かみふ松 九兆

俳田舎

これいこもひあめ拍子のあめふ

俳田舎の競う川き 蟻足

梅まきくあつまらうとや

あまきくさあふれとまうり小 嵐雪

り秋のほみ日霜さくたか 文草

まある秋の夕や風わらう 九兆

世の中ハ鶯鶯の尾のひまふり 全

塔奥の鳥あまきくや秋の音 荷兮

春

梅咲く人の愁の悔あめ 露沾

上臈の山花ふましくくまふ

候ーまらうとく

梅り香や山花撮入たのまふ かき 去来

梅くまらふ入四ハ牛の角 句空

庭真

梅く香や砂利くを流とそあ奥 土芳

く河橋や菅まきく身し梅の花 膳可 半残

梅く香や梅りうふひの吹しき 膳可 暉氣

くまのあやけつるやとこゝろ 共角

子良館の後ふ梅やうらつ

市あふれ子のうらつとく梅の花 芭蕉

應教や仰ぐとこれの秋の梅 千那
度終く向うあつらむむね宿 九兆
日當りの梅咲くころや骨牛房 支幽

暗香浮動月黄昏

入おの梅ふよりさくらきう丸 瓜麥
武江ふわりむく旅亭の残夏 乙筋

幸未のこゝはすのこゝはつこゝは
けしよりしれて梅の白ひききりあつた
旧友荒涼うそあつこのさやむらと
あゆむとこのあつと日とつらふとつら
此やふらむとこれともあつたて感動
身むとつらむらほむとつらむらあつた
その秋のさやふらむとつらむらあつた
かゝるさ七人のまゝ風雅とこれさや
さきつと又一白ひ宵の梅 嵐蘭
百八のうひてさひや園の梅 其角
ひらき梅は旅亭とつらむらあつた 去来

憶翁之客中

野田や春遊のけし梅さき 史邦
と川市やさきつ博多さきさき 嵐蘭
春の月あつたつらあつたさきさき 如行

猿おとさきとつらあつたさきさき 嵐雪
つらあつたつらあつたさきさき 路通
七枝や梅ふらつたつらあつたさき 其角
さきとつらあつたつらあつたさき 文草
つらあつたつらあつたさきさき 其角
つらあつたつらあつたさきさき 全
つらあつたつらあつたさきさき 去来
つらあつたつらあつたさきさき 一
つらあつたつらあつたさきさき 溪石
つらあつたつらあつたさきさき 其角
つらあつたつらあつたさきさき 九兆
つらあつたつらあつたさきさき 奥日
つらあつたつらあつたさきさき 探丸
つらあつたつらあつたさきさき 宅

○梅の

垣こゝふらうしてそふん柳ハ 遠水
よここ川柳まふらうこ柳ハ の水 尚白
まふ柳のまふれや親のほふ伊賀 一啖
まふけや拾いうこ場のまふ日 木白
侍甲の西月ゆきやとこく月 揚水

田家少在る

まふらうこふらうこまふらう 梅の夢 芭蕉
くらまふらうおのひ切時梅の夢 越人
くらこふらうかまふらうて梅の夢あふら 去来

露沾公ふて餘寒の當座

まふらうめふらうてまふらうぬ羽織ハ 龜翁
ゆふの梅のまふらうてまふらう二月ハ 尚白
ゆふまふらうや梅ふあまふらうまふらうハ 龜翁
ゆふまふらうやゆふまふらうあまふらうハ 嵐雪
青はらのまふらうてまふらうあまふらうハ 九兆
向まふらうはまふらうてまふらうのうハ 其角
人のまふらうてまふらうて梅海苔尾張 杉峯
まふらうまふらうてまふらうてまふらうハ 元志

陽まふらう取つてまふらうてまふらうハ 荷兮
かけらうまふらうまふらうてまふらうハ 百歳
かけらうまふらうまふらうてまふらうハ 土芳
いゆふのまふらうてまふらうて伊賀 水固
野まふらうまふらうてまふらうてハ 九兆
うけらうまふらうてまふらうてハ 芭蕉
いゆふのまふらうてまふらうてハ 配力
狗脊のまふらうてまふらうてハ 嵐雪
ゆふまふらうてまふらうてハ 路通
まふらうてまふらうてハ 野水
まふらうてまふらうてハ 九兆
まふらうてまふらうてハ 沢雉
まふらうてまふらうてハ 嵐虎
まふらうてまふらうてハ 猿
まふらうてまふらうてハ 芭蕉
まふらうてまふらうてハ 史邦
まふらうてまふらうてハ 羽紅

猿この

泥龜也苗代多の畦つこい 史邦

障りまらる本舞の竹や虫の糞 昌房

振舞やもたふあもまの鏡 去来

たつ風ふろま鏡のなる宮の鏡 伊賀 萩子

槐神くまろあつこやとんあの子 羽紅

ひのた境まきぬ塔振下 三河 鳥巢

里人の海まきくる田塚の丸 荒推

だつちまててあ藤ふろり蕙のまか 半山 残

紙まきれても振る蕨さゆかた 桃妖

つものちつこまのまむむや 濤 園風

日の光やここのこの奴まきめ 珍碩

あつ鏡しむまのまきあ流のまき 土芳

雲のあやまきまきまきまき 芭蕉

越より花録くびりこて花のちんちん

まきまきまきまきまきまきまき

籠りのまの樟の枝枝ふりへぬ 九兆

うまこまのうまこまのうまこまのうまこま 石口

ふかきへん 鳴くまきまきのまあつり 杉風

はらうの中の桐まや組まのま 芭蕉

芭蕉庵のうまこと新

まきまき小湯あまひいしんやまきまき 曲水

あ瓜菊 結しんそんそんあつあつ 山店

晝讀

正吹やや後の信炉のまきあ 芭蕉

白むのあまきつらつら 梧う那 車未

まきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまき

并わらうまむやちり 核 羽紅

鳩牛キうつせくる椿の那 坂上氏

まきのまおとまきまきまきまきまき 芭蕉

まきのまおとまきまきまきまきまき 伊賀 利雪

東叡山ふあまき

少坊まやねふろつれてまきまき 其角

つねいとまきまきまきまきまき 尚白

鶴のあまきまきまきまきまき 九兆

まきまきまきまきまきまきまき 丈草

○猿の

有母のまろくく山候まほくく 史邦
を新ふとられてくふはたのる 千那

葛城のふりごとく

たんとくくたふあけり津の敷 芭蕉

いづれ國を柱のたはまのくく南の

八重の料ふ附られくくくくく

はら

一里のこれたちのり子孫くや 全

七文の墓東玄谷中ふはしふ意あて

ふん廿年の後く地ふくくくく暮の

おふ様様を侍りくかめく母の物

うくくくくくくくくくくくくく

墓のたてまはれ侍り

まろくくや花のくくくのむく 園風

おんふらくくくくくくくく 去来

らる侍のむくくくくの都く 凡兆

浪人のやとく

飛たまのねあけくく 叙 半残

照くくくくくくくくくくく 長眉

たの奥まはくくくくくくく

大岩のやよりの奥の花の果 曾良

道灌山ふの居る

道清のたはくくくの代も嵐く 嵐蘭

源氏の侍とて

揚子におもくくくくくくく 羽紅

庚午の歳あを燈く

焼くくくくくくくくくくく 北枝

くくくくくくくくくくくく 凡兆

海堂のたはくくくくくく 江戸 普船

大和の御のく

系山くくくくくくくくく 芭蕉

くくくく 探丸

くくくくくくくくくく 智月

くくくくくくくくくく 山川

くくくくくくくくくく 伊賀 式之

木曾塚

○猿の

そその石もわらうは雪のふる
乙 弱
そのおいとわうお楽の堂
曾 良

望湖水惜春

ひまをさるにのくことさる
芭 蕉

昔の羽を刷ぬまの
去 來

一ふき風の木まふ川
芭 蕉

股川の朝つらぬ川
九 兆

たぬきとおとを源池の
史 邦

まのく戸ふ昔の遠のく宵の
蕉 來

くふれくまを名おの梨
來 邦

かとおくるを縁どうく社
蕉 來

もさくさるふささめやまの
北 邦

何ゆも昔の因いあつら
來 蕉

里とえ初く午の貝ふく
蕉 來

ほつまもまきのゆまの
北 邦

芙蓉のえれのはくく
邦 兆

吸おハ先をふれく
蕉 來

三里あまりのるか
來 邦

このまを盧同く男辰
兆 邦

さあつまの母の
蕉 來

昔れくくふふまの
兆 邦

のくくあつてはの
來 蕉

いら付く二日のおの
兆 邦

きけよまの北
來 蕉

火のりふまの
蕉 來

ほくまの
兆 邦

瘦者のまの
蕉 來

隣とくく車引と
兆 邦

うさくを根被
蕉 來

今や別の刃さ
兆 邦

せりくく
蕉 來

何のん切くる花
兆 邦

まらふ昔の月の
蕉 來

湖の秋の
兆 邦

○猿の

柴の戸や草まきぬをまねてあそぶ
ぬのこきおろし風の夕まはし
押合て静ていふくらあまうら
たぐいのそよのやうとあそぶを
一掃歎つらるる定のたれ
枇杷のたまふよあまきりえらう
去来 九芭蕉 九兆 九史邦 九

邦 兆 来 蕉 兆 邦

市中ハおの白ひや夏の舟
けりくくくと門くのあう
二書もまらぬも果てれ種あそび
ぼろろくくくくくく一校
此節ハ節も足知てそよひをまよ
たぐそひやうくくくくくく
ま村くくくくくくくくくく
き露の芽とりふり能ゆりそす
道ふのおろりハそよのつらむ時
能きのとせ尾のあハけうき

九 兆
芭 蕉
去 来
兆 来 蕉 兆 来

魚の背あそぶるここの老とそく
侍人のくくくくくく門の極
まらくくくくくくと何とあそぶ
陽後ハ竹のさそふまのくき
苗香のさそとやそふそくく
傍やうくくくくくくくく
さう川の橋とせと経る秋の舟
年ふくくくくの城もくくくく
むくくくくくくくくくく
とけふくくくくくくくくくく
遊くくくくくくくくくく
てつらくくくくくくくくくく
戸際もくくくくくくくくく
てんくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
をくくくくくくくくくく
そのくくくくくくくくくく
ゆくくくくくくくくくく

蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉

○ 猿の

まをさふおしく居ていぢやうと
命うまうまう様集のこと
さまうまあふりうまうまう
浮世の果てこれ小町あり
何故よ期まふふれ後々
りるまうまうれい居て極
まのひまうまうまうまう
かひまうまうまうまう

九兆土芭蕉土去来土

灰汁桶のまをさうまうまう
あつうかまうて寄集まう 秋
秋まをさまうまうまう
まうまうまう十のまうまう
あ代経まうまうまうまう
まうのまうまうまう 雪
まうまうまうまうまう
摩那まうまうまうまう

九兆

去野芭

蕉水来兆蕉来水 蕉兆来蕉兆来蕉

まをさふおしく居ていぢやうと
命うまうまう様集のこと
さまうまあふりうまうまう
浮世の果てこれ小町あり
何故よ期まふふれ後々
りるまうまうれい居て極
まのひまうまうまうまう
かひまうまうまうまう
九兆土芭蕉土去来土
灰汁桶のまをさうまうまう
あつうかまうて寄集まう 秋
秋まをさまうまうまう
まうまうまう十のまうまう
あ代経まうまうまうまう
まうのまうまうまう 雪
まうまうまうまうまう
摩那まうまうまうまう

兆蕉水来蕉兆来水 兆蕉来水 兆蕉来水 兆蕉

○様との

うそつこふ自惚いせせてはぢん
ふんち平の親と、九物とて
悦より田のまやとていさぢよ
か茂のやうらいよとて社あり
お葉の尻とてうとくもあまて
るのやうりの云々迅速
さかふるまはるのさのうとてよ
さうらうくもふ葡萄のさうくらん
もさうらう後つさつふさうらう
まふら母 嚼のせうら

九兆九芭蕉九野水九去來九

水 來 兆 蕉 水 來 蕉 兆 來 水

餞乙洲東武行

梅を葉まうこの宿のさうけ
かさあさうらうとてさ乃 咲
ささ蕉 山田ふちおはるさ
さうとて後つてしとれさうら
斤隅りしとてさうとてさの母

芭蕉 乙 易 素 珎 碩 易 男

二階のさあいさうとてさあ
あさうらうらうのさうとてさ
痛のさあ延の力あさささのせ
わつしんのさうらうらうらうら
肉を顔りとてさあさあさあ
卵の刻の眞子小さふああ
まささささの木のさうらうら
葉のれさうとてのれふさうら
さうとてさうらうらうらうら
ほふとてさあさうらうのさ
けさささささあかのあつら
徒の柄ふさささうらうらうら
たささささささからさあ跡
名
まのりふはあてさうらうら
衣を物さうらうのさうらうら
汗のさうらうのさうらうの糸
さうらうらうらうらうら
大擔さうらうらうらうら

蕉 男 碩 蕉 易 碩 男 易 蕉 男 易 智 月 九 兆 易 去 來 兆 秀 來 半 残 土 芳 殘

○蕉の

芳ハぬれ紙の取所なき
 小刀の拾又なる細工もこ
 棚より火とあき大年の夜
 園
 ちよちよ合せせよるかこきぬ
 猿
 はまもこのれめとくる破扇
 凡
 野水
 雛の伎と深るこるうせ
 羽
 芭蕉三 比易五 土芳三 珍碩三
 園凡三 素男三 猿雌二 智月一
 嵐蘭一 九兆二 史邦一 去来二
 野水一 正秀一 羽紅一 半残四

幻住庵記

芭蕉州

石山の奥岩間のところろ山有國分山と云
 それを國分寺の名とほあつて一麓畑き
 流と流つて嬰機山登る事三曲二百歩ありて
 八幡宮とせしむる神降はは原のそ像も也
 唯一の家小い甚忌ある事と两部を和らけ
 利益の壁と目しうとあやも又貴し日はい
 人の詣さうりせといひて物あつたる傍に
 経拾草の尸屋よめを根絶たせかきむ根
 りり根絶て掘程ふとと流るり幻住庵といふ所
 一の傍何じい勇士菅沼氏曲水子の伯父うあん
 竹りしと今ハ八年計ひくふ感て正了幻住
 老人のあとのいせり予又市中とさるる事
 十年計りて六十華やちるるに善虫のみと
 失ひ蝸牛の象と解て奥羽遊浮の暑き日
 下面とこり言すれこあゆりき北海の
 善哉ふきふきと破りて今嵐湖あのはふ漂
 浮の浮葉の流るるまうらき草の一本乃後

○猿の

むれりく軒溜茨あはれめけり遠慮あして
 灯舟の初はらうらあふひ一山のやうと物と
 さくおのゝこゝろにぬくふそのをばもさうらに
 つじなせりの山をたふあて時をさひくさう
 宥う〜もの候さくあをまう〜この候〜んた
 い〜〜と〜らふ身〜て魂只楚東南ふ
 へ〜と身ハ瀟湘洞庭あま山と未申ふそ
 たらち人家よ〜ほ〜ふ修り南薰峯より
 杉修〜北風海と浸して涼〜日枝の山は石
 のさ根より辛崎のねをまをらて旅を橋名
 物〜〜ゆあり〜とらふあ〜入あ熊のふ〜藩の
 もゆふああ〜る〜す〜飛〜ふ〜雲のさ〜ふ〜鶴
 のねをさあお〜〜たら〜〜ら〜ら〜り中宿
 三上山ハ古名家のけり〜ああひ〜て武蔵社のまき
 柄もあひあ〜る田山山古入とあ〜ら〜は
 つ蕨千丈とあ〜待〜鶴と〜る〜あ〜と〜里〜ら
 い〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 の祭〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら

遠のわり松の翹作〜あはれ〜とあて橋の橋
 脚〜あ付位海棠〜葉と〜と〜ら〜主翁。あゆ
 庵と後〜る王家徐佐う流〜らあ〜ら〜唯睡碎
 山民〜成て舞龍〜〜と〜と〜けお〜空山
 う風と打〜く〜あ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 叶と若の流〜らと流〜く自ら炊〜ら〜ら〜の
 竟と〜ら〜ら〜一野のゆ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 信〜ら〜人の跡〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 ゑ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 降〜くおのね〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 つ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 翁の甲斐〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 のあ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 とい〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 字と源〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 ま〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 ち〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 松の〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら

○接しの

くふんを物しあるは世守の里のよのこ
 九入あるそめあまの橋のひあゝるを
 畑ふらふらちを我すくぬ昔終日既ふ山の
 陽くこのまを杖を釋く月をけを
 新と伴ひ燈をあるは因兩ふそを
 うくくそそひさふふふと好く山
 跡とくくくひふふふふふふふふ
 世といふひふふふふふふふふ
 一物そふの料とあふふふふふ
 無余の地とくくくくくくくく
 扉ふわんふふふふふふふふ
 とせめ花もくくくくくくくく
 くるくくくくくくくくくくく
 此の柳ふつあふふふふふふふ
 老杜の庭くくくくくくくく
 いつくくくくくくくくくくく
 せそふのひ推のまふくくくく

題芭蕉翁國分山
 幻住菴記之後

何世無隱士以心隱為賢也何處無山川
 風景因人美也間讀芭蕉翁幻住菴記乃
 識其賢且知山川得其人而益美矣可謂
 人与山川共相得焉迺作鄙章一篇歌之
 曰

琴湖南兮國分嶺
 古松鬱兮綠蔭清
 茅屋竹綠總數間
 内有佳人獨養生
 滿口錦繡輝山川
 風景依稀入俳城
 此地自古富勝覽
 今日因君尚益榮

元禄庚午仲秋日
 震軒具草

凡右日記

時多る背中んてやう禁葉う那 曲水

○猿の

くつさぬの路を川うせ交の山
野水
鷲のさしゆく時りあ鷲をく
去来
はらふふもるるやアア
元兆
新ちうとと利あさるれ後あ
千那
御座のやさあさや交のやま
珠碩

贈紙帳

おりのつふ成性ふうけと帰るる
野徑
いりこいてさのまふりあうとれ
里東
そり花雪のこわさけのま
怒誰
顔や岸の中の花うつさ
昭野
もろくく一もふと結まておる言
探志
夕烟ちぬまうらうのけりんこま
元志
あつさあわくくてさるあ鷲か
日
泥上
まあ少川程さくくや風のま
史邦
月ゆやほを毛目くうあま
七人
正秀
あつさあわくくてさるあ鷲か
柳陰
あつさあわくくてさるあ鷲か
如行
訪るあやまあり

椎のあをさくくてさやせしのみ
脇所
月あやもはくくわくくは海原
美原
市
文よ云くす
隠

松所あや早苗のくけふ夕原
半残
まの粉と土産ま
之道

一やまらわくくわお田のこくくま
書音
一まらるらくくくうりや松原ま
長寺
魯町

夕まや松原の臭のくま
及肩
登猿腰掛
尚白

秋風や田との山のくわくくより
尚白
贈葉

ま〜まもま〜あ〜あ〜ゆ〜ゆ
比枝
あ〜あ〜く〜く〜く〜く〜く〜く
木前
包紙ま書

海うさくま〜ま〜や萩のあ
勝所
扇
福のまらわくく〜佛の土産ま
智月
石山やゆ〜く〜果せ〜秋の風
羽紅

桐の編やきりて心むきりて
里いづれやめりしころのそとに
嗚やけりし境ふらふのそとに
越人とは何れ訪ふ

昌房
何処
越人
等哉

蓬の實のけふ花入るる那

明年海生尋旧庵

さるやゆりし果れしつゝ
岩蘭

同夏

ま〜ま〜やはる〜人経〜
曾良

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽首韻也非比
彼山寺偷衣朝市頂冠笑只任心感
物写興而已矣洛下逸人允兆去来
随翁遊学棋館竹窓躡等凌節斯有
歲屬撰此集玩弄無已自謂絶超狐
腋白裘者也於是四方啞友憧々往
来或千里寄書々中皆有佳句日蘊

月隆各程文章然有昆仲騷士不集
録者索居窳栖為難通信且有苑倪
婦人不琢磨者上鹿言細語為喜同志
雖無至其域何乘其人乎哉果分四
序作六卷故不遑廣搜他家文林也維
貶元祿四稔辛未仲夏余掛錫於洛陽
旅亭偶會兆来吟席見需記此夏題書
尾卒援毫不揣拙庶幾一蓑高張有補
于詞海渙人云

風狂野衲

文艸漢書

正竹書之

續猿蓑

八九百をてる傍る柳う那
まのうゝまの畠なるあを
神あそびるまをトよのあね織て
肉いゝまゝつゝ一晚のふまひ
きのつゝ目初てまゝる月の巻
狗脊うれて机をくうなふ
浴所もくゝい風ふれれう
孫く娘とも祖父の傍沙
狐さゝあふてほろろる膝力
煤とまよろそけや解の短
幼虫のやまろそけ賣らふ来て
十里そろりの金あく出うるを
毎のまふふゆねをねりあふ
わらまうのなまこ門の書つけ
いゝくゝ後い沙はれき場暗さ
やうとあふまをまのあつて

芭蕉 沾圃 馬里 沾圃 蕉里 蕉里 沾圃 蕉里 蕉里 沾圃 蕉里 蕉里 沾圃

○續猿

ゆゑに浮世の幸阿のくく
羨ハ志くくはこくぬ一徳
徳を承と志めりてきこく
を福ある半乃深纏
くくひるのぬくをと持たし
志あぬ合をくくかふてある
ゆゑにふるくくちの若く中あつ
之候敷候の前のりさむく
けのきよふこよる若きののむきく
あつてむきをまの芥くくく
口くふ寺の持園をくく
夜のあまのあつて、
あつてくくまのくくくく
早下くくくくくく料理く
乳くく秋あつてくく
あつてくくくくくく
はきく實の母のあつて
あつてくくくくく

里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾

志のきくくく
すてき味よとく
花のりけきとく
けのゆの土のくく

里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾

いゝくくく
そのまのくく
大根のくく
上下とり小胡菜のむ秋
町切小月之の次の花め
あつちくく
智恵虎のけのけ
ゆゑにのけを
組のきくく
目利くく
状業と發向の能御く
まて七つうく

里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾 里 沾

○續猿

かろふみ糸のくくくをかめかみ岸のれ
くくくくくくくくくくくくくくくくく
つくつくくくくくくくくくくくくくく
のま秋とくくくくくくくくくくくくく
あまいとくくくくくくくくくくくくく
墳とくくくくくくくくくくくくくくく
か茂祇園の塚くくくくくくくくくくく
はくくくくくくくくくくくくくくくく
う湖あり納塔とくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
とくくくくくくくくくくくくくくくく
て傍あり傍あり傍あり傍あり傍あり
りのありとこのまうくくくくくくくく
岸ふ少和とくくくくくくくくくくくく
まくくくくくくくくくくくくくくくく
なり一美年ありくくくくくくくくくく
てわきくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく

鳴くくくくくくくくくくくくくくく
はをけつどもあまのつうくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
時るのくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
まくくくくくくくくくくくくくくく
まののくくくくくくくくくくくくく
きくくくくくくくくくくくくくくく
そくくくくくくくくくくくくくくく
よあとのまきくくくくくくくくくく

夏のおやあつくくくくくくくく
おいかくくくくくくくくくくく
きくくくくくくくくくくくくくく
たきくくくくくくくくくくくくく
母恋のちきんちりくくくくくくく
あまふてあつとくくくくくくく
秋と坊坊のくくくくくくく

芭蕉
曲 翠
卧 高
惟 然
支 考
芭 蕉
翠

花びて竹えさる新のやけさか 洒堂

留まぬ酒屋よあそびて文をなす

由碑のまゝおふおひおろくふ

酒の香をうき香の香せよ空の花 惟然

映りてほむされりうさくら花 支考

人のまへにかく籠りてその花 沾徳

くもりや中一の花のわ面 猿雖

七うよりあそぶおろる中一 陽和

えり折あひおろるやその花 乙州

咲花としらうき花の香ふ 木節

二の花やさくら咲く花の鼻 沾荷

善美の妙方ふひうく花 子珊

田家

藟翁の名物とせん山さくら 卓袋

咲くも花や飯茶ふ十石 李里

山門よ花のうきよのふり 挑首

なるれ木の根もあつらふ花の枝 如雪

花をよきせして似合ひ人の 其角

とれやうよをよきせして花の香 少年

ぬりて花の香のあつらふ花の香 卓袋

一日の花のあつらふ花の香 沾圃

八重の梅もあつらふ花の香 全

若菜

陽流や花の香のあつらふ花の香 嵐雪

東の山もあつらふ花の香 曲翠

夕陽の山もあつらふ花の香 孤屋

一うふの花のあつらふ花の香 尾頭

梅附柳

まゆや花の香のあつらふ花の香 芭蕉

さう梅のあつらふ花の香のあつらふ花の香 野水

里坊う花の香のあつらふ花の香 其角

投入や花のあつらふ花の香 昌房

病僧の香のあつらふ花の香 良品

あつらふ花の香のあつらふ花の香 曾良

續様

あつらふ花の香のあつらふ花の香 万手

魚のまを梅の隙まて下流の江
ふく梅やくくうまふれきあふり
森ふや梅のあひいとてそそるん

魚日
千川
大舟

五井の社上詣て

舟あつけとけりや梅の羅きふ
それくの隙のちりや梅柳
叶くいのあふちり川柳
ちりをを敷くちりや古柳
ま梅のちそれくまやるの曲
柳とくけてるまをる柳うぬ

遊糸
千那
意元
李由
九節
巴文

鳥附魚

そふも古刀くくる美庵うれ
くくいもやゆふ梅紙の風多
そふもふもくはゆめんらうし
鶯や柳のうしそ最のま
流るるもひけと終のりら
まるるも美ふつてまん終のそ
弱きの月うらやとらけり

其角
史邦
智月
芭蕉
去来
洒堂
傘下

弱きのまふ似合き白紙を
燕や田とをうくくそるのあと
巢の中やめと細くして秋燕
存子や婦ふ世ふい一終の雁
蠟うらふふく雀の子附ふ
り鴨やふ風ふつれるの残燈み

長虹
野童
少羊
峯嵐
槐市
河瓢
釣帚

芳野西河の隙

船の子のふとさまり一隙の音
かけりふと共ふちりく少紙か
あふ美のつかこまりやゆき
白雲のちりこほるれらあふく

土芳
圃水
子珊
山蜂

流川少あそひて

ちりくくとあふいさうくるまふ小
ちりくくとあふいさうくるまふ小

其角

春草

ちりくくとあふいさうくるまふ小
ちりくくとあふいさうくるまふ小
ちりくくとあふいさうくるまふ小
ちりくくとあふいさうくるまふ小
ちりくくとあふいさうくるまふ小

正秀
此筋
羽紅
様雖

續後

宵のるるや土等の長しう 闇指
 歩むや梅のさふよあうなき 車來
 露をくもくさふの毛鬼あま 荒雀
 蛇よりくろひるるの葉うね 馬覓
 踏まゝく土塊の切目や露の候 拙侯
 ふく例を形ふるるく土大根 乃龍
 子やふやまゝく山の手くろく 正秀
 味増かたをのふらひも肥るるま 夕可
 日の影く梅の根は梅根候 一桐
 蒲の葉やまゝくくあゑる葉 圃落

梅意 附明蝶

くろく梅月ふらふ常梅の意 探丸
 くきさあわくくや梅の葉候 支考
 せのくくくくくくくくくく 美已百

白日志川之也

くろくくくくくくくくくく 柳梅
 文文文のうくくくくくくく 惟然
 味の梅や川を候よりくくく 闇指

此竹小節の如きる少候 出羽 重行
 春鹿 雪窓
 春耕 沢雉
 妙福のくくくあてり梅麻 木節
 菊礼やまじほふのさふふ 此筋
 千川の田とうくくく 遊波人 一鷺

挑附扶

白柳やあつくもあま水の色 枕隣
 今柑いよとまきあう 花 介我
 伏えくくく葉採のよの梅の花 聖芝
 梅さくくく中さくくく梅の花 水鴨
 花さくくく柳や花舞枝の根候 其角

江東の李由く徳文の懐旧の法に 其角
 おのく 經文のちの白ふ証の 其角
 光のくくくく

小枝綿小光とやとせむつらき 角上

續猿

穂の穂くきふはたは穂の穂くき
残香
名あたるるや花のちその宛
洞木
ちり穂あまうりわらうふ穂てくる
野坡

款冬 附 野藤

山吹や花ふ干ころの暮一守
闇指
田家の人ふ對して

山吹をいふあうりふは穂の穂くき
洒堂
花あまうりてしの穂や磯のうり
雪芝
藪野や穂あまうりてしの穂や磯のうり
荊口

夷月

山の隅とらうりて白あうりまの月
魯町
夷月 附 夷名 陸

おもしろくそこの花をいふまの月
荊口
あまうりてしの穂や磯のうり
乃龍
まの月や花あまうりてしの穂や磯のうり
遊力

あまうりてしの穂や磯のうり
あまうりてしの穂や磯のうり
あまうりてしの穂や磯のうり
あまうりてしの穂や磯のうり

まの月や花あまうりてしの穂や磯のうり
支考

春のや光うりてしの穂や磯のうり
挑首
はるのや光うりてしの穂や磯のうり
風麥
りつと花の穂のうりてしの穂や磯のうり
風睡

汐干

のりつと花の穂のうりてしの穂や磯のうり
去来
ふ川ふりてしの穂や磯のうりてしの穂や磯のうり
闇指

雑春

おもしろくそこの花をいふまの月
許六
あまうりてしの穂や磯のうりてしの穂や磯のうり
風睡
まの月や光うりてしの穂や磯のうり
土芳
うけりつと花の穂のうりてしの穂や磯のうり
配刀
小糸花あまうりてしの穂や磯のうり
万乎
あまうりてしの穂や磯のうりてしの穂や磯のうり
苔蘇
あまうりてしの穂や磯のうりてしの穂や磯のうり
均水
まの月や光うりてしの穂や磯のうり
正秀
三尺の穂あまうりてしの穂や磯のうり
仙花
川をのりつと花の穂のうりてしの穂や磯のうり
文浪
三月

藤おと白濁賣のあまう那 支考

威旦

あまのやのふきくーささ層少 少年 武仙
 延道とくまのうけまのま所ふ 百威
 うらひまや箱巻るまそのまうき 尚白
 首の木の貝あつらふくー標の貝 圃落
 母方の改りつらーやきを路 山峰

詩ふらるる名堂と顛倒まらるる

と老父の文ふち紙ーはれい

元日おあ保とさのうー表 千川
 人もえぬまを後ゆうらの物 芭蕉
 明らぬのやのう小晴しよあま 其角
 標の世何ゆまらうやまうらう 嵐雪
 万果やたぢふららして松陰 去来
 夢うらう橋えんまらるる羽ふささ 土芳
 と川まをやうくはるるるるな細法 凡睡
 ふらー孫をまうけて 椽雄
 えりやまうくはるるりの梅の花

ふらふら川おあ保やさゆらささ
 脊まらー自らおとんせまを花のま 野童
 美ゆのまふらん包尾の綱のまら 耕雪
 魁の美のまを字とわく西日か 左柳
 と川まをやのうあ後の日比丘尾 前川
 枇杷のまはふらねくまうらま 斜嶺
 世のまを花をあれとまらま 山峰
 標のうやうらうけのやりぬ 住行
 えりやまをまらあまこ梅のま番 竹戸
 我者まらうらに流まらまらり 是楽
 からあやや籠ふねらくまらまら 沾圃
 重りーのまのりまららるるま 圃角

夏之部

郭公

曉の電とまらまらほらまら
 むらまらまらや明らまらるる 其角
 まらまらまらまらまらまら 文草
 まらまらまらまらまらまら 曾良

續椽

胃魂のあふれたる朝顔の如雪
野萩のあふれたる如雪
芦本
はるかにあふれたる朝顔の如雪

あふれたる朝顔

郭公のあふれたる朝顔 沾圃

木附草花

椿や日よころれたる朝顔 闇指

里くのあふれたる朝顔 野萩

園中ニ夕

は中のあふれたる朝顔 此筋

手切のあふれたる朝顔 千川

野百合やあふれたる朝顔 素龍

龜山家の百合

白き朝顔やあふれたる朝顔 支考

山よそくのあふれたる朝顔 尾頭

あふれたる朝顔 沾圃

あふれたる朝顔 抽候
伊多
宇多都

あふれたる朝顔

夕よそくのあふれたる朝顔 芭蕉

夕よそくのあふれたる朝顔 荒筋

薄のあふれたる朝顔 残香

菫のあふれたる朝顔 此筋

あふれたる朝顔 白雪

あふれたる朝顔 良品

瓜

あふれたる朝顔 芭蕉

あふれたる朝顔 至暁

あふれたる朝顔

あふれたる朝顔 風弦

早苗

あふれたる朝顔の田植のあふれたる朝顔 長崎 卯七

あふれたる朝顔のあふれたる朝顔 闇指

續様

ふらふらの種ふれ〜魚目
田植奇ま〜重行
一田つ〜北枝
早のふ〜文考

虫

好ま〜許六
し〜野萩

納涼

涼〜半残
江葉花〜唯然

涼川の暮ふり

〜史邦
涼〜重翠

漫興三首

〜社年
〜万乎

〜洒堂
〜支考

生蔵と〜雪芝

そと〜

涼風〜游力
い〜全

〜去来

〜正秀

職人の〜土芳

涼〜我眉

お涼〜里圃

盛夏

か〜野萩
事〜万乎

森野者の〜

け〜正秀
〜乙州

〜怒風

落〜素覽

〜我峯

續探

何れも口や... 印 苔
粘りあつて... 卓 袋
粘りあつて... 里 東
まよふれい... 沾 圃

竹の子

菊... 可 誠
あふれや... 曲 翠

お月雨 附之立

あふれや... 不 玉
あふれや... 芭 蕉
あふれや... 沾 圃
夕まよふ... 拙 候
白るや... 苔 蘇
ゆふまよ... 圃 水

蟬

白るや... 正 秀
きつ... 胡 故

虫の... 乙 洲
蟬... 曉 鳥

のり

菟... 葉 蛤

雑夏

空... 杉 凡
虫... 荊 口
ま... 如 真

川 物

あ... 文 鳥
あ... 葛 葉
夕... 水 鷗

魚... 馬 覓
あ... 重 翠
あ... 野 童
あ... 水 鷗

晋の漢明

定形くさるる草 芭蕉
粘るる乳惟子かゝるる草 惟然

貧僧のくさるる草
よする草よする日の烟原の草
あして世らよする

惟子の粘るる草 支考

穂の部

名目

名目よふの草 芳世田のりり
名目の花くさるる草 棉 島

あゝの草 芳世田のりり
夜この二の草 芳世田のりり
いづの草 芳世田のりり
川へくさるる草 芳世田のりり
よふの草 芳世田のりり
園位ちるる草 芳世田のりり
芳世田のりり 芳世田のりり

草くさるる草 老杜の唯雲水のりり
とくさるる草 芳世田のりり
次の穂をくさるる草 芳世田のりり
よふの草 芳世田のりり
よふの草 芳世田のりり
よふの草 芳世田のりり
よふの草 芳世田のりり
よふの草 芳世田のりり
よふの草 芳世田のりり
よふの草 芳世田のりり
よふの草 芳世田のりり

支考評

名目の草よふの草 酒堂
名目や西くさるる草 如行
かゝるる草 露 沾
よふの草 智月

名月やさきの庭を人のり 聞指
明月やお科よりののさまりあり 涼葉
明月や庭の境をほらとちちち 不玉
中切の梨ふきまのつくく日えみ 配力
名月やさきのつくくまむきさ 左柳
明月やさきのつくくまむきさ 圃水
おむきさあそびたかむらおの月 山蜂
明月やさきのつくくまむきさ 風国
名月やさきのつくくまむきさ 需笑
名月のまの今宵の月のぬきさ 重友
明月ようれい 泥竹
いせのいせふあつてかりのきと
あつていせふあつてかりのきと

つらなまうてさか地さつあつ月えみ 支考
芥多の海と潮をそけしん月えみ 空牙
柿の名のお即とさよ月えみ 如真
山名のおつてと森のやまの月 宗比
名月や里のさかひのまよみ 木枝

場ふ庭く月えみやうや庭様 利合
明月やさきのつくくまむきさ 丹帆
明月やさきのつくくまむきさ 野萩
花入のあつてとさつ月えみ 正秀
淀川のわらう月えみ 水草
海川のさつてと月えみ 景桃
海川のさつてと月えみ 景桃
家ふ三老かつてと月えみ 景桃
松さつてと月えみ 景桃
松さつてと月えみ 景桃

明月やさきのつくくまむきさ 沾圃
明月やさきのつくくまむきさ 馬寛
明月やさきのつくくまむきさ 里東
明月やさきのつくくまむきさ 牧童
海川のさつてと月えみ 芭蕉
川さつてと月えみ 芭蕉
十のあつてと月えみ 全
いせふあつてと月えみ 猿

七夕

續

文のやみの田のくんの天の川
 星をなすをまてはきおれ鳥
 船形うのきまらるるや星の光
 たりりこころぬるゆきまらるる
 露風やまき露の園りち
 乙 沽 東 惟
 州 圃 潮 然

立秋

粟めりやをよるるる秋
 秋の川の中はあつらふ
 露 川
 尾 次

秋草

秋の草の遠きを枯枝か
 細くもれあつらふ枯枝のつら
 女帝花ぬめりる香の染りゆ
 とまらるる枯枝の枝よまらるる
 一まらるるあつらふちう
 う園のうらみあつらふ
 柳 梅
 随 友
 濁 子
 馬 覓
 鳥 栗
 文 浪

贈芭蕉菴

百合のこまきまらるる令
 さう娘のあつらふるる
 史 邦

枯のちるまらるるや
 秋のちるまらるる
 おくやるるあつらふるる
 若のまらるるあつらふるる
 山人のまらるるあつらふるる
 風あつらふるるあつらふるる
 万 乎
 芭 蕉
 至 境
 雪 芝
 荷 兮
 桃 妖
 杉 下

朝うけ

秋のちるまらるるあつらふるる
 あつらふるるあつらふるる
 あつらふるるあつらふるる
 秋のちるまらるるあつらふるる
 田 上 尾
 關 指
 風 麥
 其 角

虫附鳥

きわらるるの情ふほほほ
 竈るや秋ふあつらふるる
 犬の情を胸ふあつらふるる
 秋のおやまらるる
 くのちや形ふあつらふるる
 可 南
 北 枝
 正 秀
 水 鷗
 杜 若

續様

猿 九
 探 九
 葛 雫
 示 峯
 文 草
 馬 覓
 氷 固
 支 考
 芭 蕉
 老の名のむらとんまてては中雀

秋風

秋風や二重とてこの秋をせ時 游力
 雀子の聲もよむや秋の風 式之
 何ふことかあつり秋の風 支考
 松の葉も細きふもぬれ秋の風 凡因
 おのつらつそよのまをくとや分小 圃燕
 ふんたもやあつらふむらら愛 九節
 あれ〜とまを海の空をくれ 猿 雫

稲妻

稲妻くくるまのま〜稲の皮 少年
 一 東

稲妻やまふる〜海のと 宗比
 鳴の稲稲妻房のまの溜 土芳
 いふら手や園の方かみ佐の春 芭蕉

木實 附菌

園栗の落て死々るををけ 為有
 炭焼ふ泥粉〜のむ後う那 玄虎
 秋空やりわらうらむ柿の色 酒堂
 片ふくと葉とわら〜松言ふ 重翠
 冬川草や枯れしは葉を 一 沾圃

伊賀の山中ふ阿叟の室居を傍ひて

松茸やあつらうら〜山の形 惟然
 冬川草や枯れしは葉をのへらうら 芭蕉

帆

浪風の舞うま〜り村おま 北 鯤

鹿

鹿をりふお所の鹿や風の音 凡 睡
 鹿うらふ鹿お〜りうらうら子 一 酌

農業

續猿

起しき一人ハ途方々草葉の花 車甯
あつり小程出むひく小穂愈小 買山
さきま〜けるるるもよ〜り 晴の楳 如雪

つせの斗後ふ山花をさすまぬ〜
草葉のい〜り〜り〜り〜り〜り 芭蕉
小穂前〜く〜り〜り〜り〜り 乃龍

山花の〜り〜り〜り〜り〜り 斗從
居りよ〜り〜り〜り〜り〜り 支考
了れのを〜り〜り〜り〜り〜り 全

批を〜り〜り〜り〜り〜り 惟然
百〜り〜り〜り〜り〜り 木節
大師の〜り〜り〜り〜り〜り

わの〜り〜り〜り〜り〜り
その〜り〜り〜り〜り〜り 沾圃

葉
百〜り〜り〜り〜り〜り 葛栗
よ〜り〜り〜り〜り〜り 濁子
若〜り〜り〜り〜り〜り 支考

題画尾

む〜り〜り〜り〜り〜り 元峰
備〜り〜り〜り〜り〜り 丈草

暮秋

産は〜り〜り〜り〜り〜り 野水
り秋と〜り〜り〜り〜り〜り 乙州
り秋也〜り〜り〜り〜り〜り 芭蕉

雜秋

み〜り〜り〜り〜り〜り 之道
雲〜り〜り〜り〜り〜り 團友
何〜り〜り〜り〜り〜り 畦止
少〜り〜り〜り〜り〜り 四友
若〜り〜り〜り〜り〜り 萩子
ふ〜り〜り〜り〜り〜り 万平
柿の〜り〜り〜り〜り〜り 宗波

平回と馬の宅ふ教書〜り〜り
被と〜り〜り〜り〜り〜り
席巻の巻〜り〜り〜り〜り〜り

續棟

けしきのしんしんちんちん
ふしんしんしんしんしん
しんしんしんしんしんしん
このしんしんしんしんしん

稀きやうのしんしんしんしんしん

冬の部

時雨附霜

くはりのけのほ月やえり時る	野
あられれを又松風の只ありそ	北
くつりり人かまよれお何る	芭
一時るよここつこつり新か	露
おしれお緒の辛の笑か減	馬
手押すわな田くわり何る	野
はままやしんしんしんしんしん	簡
後言と出よ芳ゆきのおまじり	空
空悠のあてハ川也時るう非	為
文うおや清くつるうしん	鷄

そよそよそよそよそよそよ	野
柿色むりねいまやむりしん	露
まじりしんしんしんしんしん	里
清きとまじりしんしんしんしん	野
り新よりしんしんしんしんしん	野
仲西のね白くくお時白く	沾
えつおや太のまじりしんしん	北
けしきのしんしんしんしんしん	支
えんねき酒しんしんしんしん	考

京堂葉園しん

雪陽の宮と津せ月のしんしんしん
 竹うしんしんしんしんしんしん
 やしんしんしんしんしんしんしん
 ちんちんしんしんしんしんしん
 なしんしんしんしんしんしんしん
 体しんしんしんしんしんしんしん
 みあうぬ

葉のしんしんしんしんしんしん

○續様

袖の色や紅あつらひの葉の赤 其角
 菊の字味ふくま境や 萩の中 桃隣
 八竹のるやあつらひの葉の赤 沾圃
 何々のわくくしとあつらひの葉 曾良
 葉あひまわあつらひとあつらひ 馬寛

紫素の隠士 琴の琴を能く
 けりしふ葉も 梅のたあつらひと
 むらりり 造化りうそふふ
 今その葉をまふひておのつら
 なるをとおふとつらふあつらひ
 琴あつらひのつらふあつらひ
 りん竹洞老人 玉ふ琴を送られり
 是とつらひとつらふあつらひ
 本葉をふつらふあつらひ
 あつらひとつらふあつらひ
 うつらひとつらふあつらひ
 草附木 素堂
 むつらひとつらふあつらひ 曲翠

水心の花のつらふあつらひ 永固
 水心の花のつらふあつらひ 惟然

山家集の題ふあつらひ
 つらふあつらひとつらふあつらひ 芭蕉
 山家集のつらふあつらひ 車庸
 むつらひとつらふあつらひ 土芳
 山家集のつらふあつらひ 露笠

本葉 附冬枯風
 おつらひとつらふあつらひ 沾徳
 おつらひとつらふあつらひ 露沾
 おつらひとつらふあつらひ 惟然
 おつらひとつらふあつらひ 扱風

牛柳坊宗比の題とつらふあつらひ
 おつらひとつらふあつらひ 一 道
 おつらひとつらふあつらひ 杉風
 おつらひとつらふあつらひ 挑醉
 おつらひとつらふあつらひ 乃龍

續椽

多粘ふもつてくも鴨あり
唯の粘くのそはあつて鴨あり
あつて粘くもあつて鴨あり
田や背甲吹く牛のあつ
本粘や川田の畔の流るあ
うらや葉まきとちよ平の角

夷講

えいし海那うりよ袴まきとちよ
えいし海那うりよ袴まきとちよ

鳥付り

のののののののののの

塵降くもあつて鴨あり
追つて雪あつて鴨あり
少ねちとつて鴨あり
入海や流のそよよ鴨あり
聖カゴモつて鴨あり
川鴨と鴨あり
吸はくつて鴨あり

利牛
支考
智月
凡介
惟然
壘生
芭蕉
利合

句空
葛栗
丈草
闇指
芭蕉
右木
利雪

うらや葉まきとちよ平の角
えいし海那うりよ袴まきとちよ
あつて粘くもあつて鴨あり
田や背甲吹く牛のあつ
本粘や川田の畔の流るあ
うらや葉まきとちよ平の角

松文多たの何暇のえいし海那うり
うらや葉まきとちよ平の角

喰りのや門葉あつて鴨あり
あつて粘くのけね粘くもあつて鴨あり
何よよと葉まきとちよ平の角
うらや葉まきとちよ平の角

埋火

埋火や葉まきとちよ平の角
焼くよと葉まきとちよ平の角
自中よと葉まきとちよ平の角

雪

初雪や門葉あつて鴨あり
朝よと葉まきとちよ平の角

車傭
岱水
杉風
拙候
里圃
文章
小春
支考

芭蕉
桃先
洞木
其角
企

さあこれのうらむをささ
騎鶴家ハとさうくもさ
まじりてさあ人あはれ
ふくむとさあをささ
江守也とさあをささ
さあはのさあをささ
駿刺とさあをささ
浮かちわとさあをささ

非樂

おれおれ馬りさあをささ

沖くさ

含めやうらむの沖
沖くさ干健とさあをささ
ぬ又の門由さあをささ
根とさあをささ

煤掃附確

煤とさあをささ
煤はさあをささ

史邦
陽和
配力
文草
圃吟
支考
葛平
祐甫

路草
馬覓
許六
沾圃

残香
黃逸

さあこれのわかや
煤掃也おれさあをささ
暇とさあをささ
解法おれさあをささ
りら煤のさあをささ

歳暮附節李候 夜配

さあこれのわかや
門外やまじりてさあをささ
賣る名やとさあをささ
後とさあをささ
大年や紀子とさあをささ
待とさあをささ
年の市況とさあをささ
市とさあをささ
川結入とさあをささ
桶の師のさあをささ
天揚色とさあをささ

馬覓
閨如
惟然
岱水
嵐蘭
馬佛

曾良
里東
草士
車来
万乎
李由
其角
正秀
萩子
稜雖
惟然

漢の秋よきと結ぶことこの意

はりの圖司呂丸羽つらうる意に
のりつらして仔細ふもさうて作りぬ
そはつらひの意かつらひつらひつらひ
今いふさうらひつらひ

管人山あふくおもあり年の意 芭蕉
余はふまはしてとんすの意の年意 支考
所ふまはしおもあり年の中 土芳
最ふまはしおもあり年の中 尚白
最ふまはしおもあり年の中 桃^山後
裁層いまのふりむ川名配 山蜂
一志まうつて都りつらひ除板の意 利合

雑冬

少屋風ふまはしつらひの意 斜嶺
栢舟ふまはしつらひの意 土芳
井のふまはしつらひの意 李下
をふまはしつらひの意 仙杖
をふまはしつらひの意 圃仙

巨魁より藤少の時を扱ふ 雪芝
山陰や横の尻振くや日白 口谷
起極より人春の根の意を 沾圃
葉川やをくく葉の意を 杉風

釈教之部 附追善哀傷

涅槃

涅槃像あつとて表具も目よと及 沾圃
福めん余も船手合る涅槃の意 芭蕉
山寺や猫ちらと居るおもん像 不撤
貧福のまをとまうや涅槃像 山蜂

灌佛

灌佛やつらふらうる井の意 曲翠
ちうさや佛うまれて二三日 不玉
灌佛や釈迦と持慶の悦意とし 之道

鬼祭

陰和んこれあつとて魂まつり 嵐雪
桑乃るのくくくやうき魂まつ 出米

○續核

甲戌の夏大津ふゆとてつるは 池圃

かきつばたの宿もよきとてつるは 池圃

あつたれ杖よりあつたれ暮糸 芭蕉

悼少年二句

うれしきや麻木の葉もどろろと 惟然

その秋をよみぬとてハ秋の風 支考

首のたぐひ移葉の良きとてハ 木節

とろろと移葉のよきとてハ 支梁

袖より移葉とてつるは 沾圃

臘八 鴨ととろりて見れば細きけ 許六

何のあれは何とてハ大津海 如行

雑題 俗東のま如きみてそまき業

罪帳の時 除くは罪のふとて 念佛か 去来

あるとて罪とて二つとてつるは 智月

々々細やあつたれとてハ 俳五世 乙州

りのつる川紙同くや 重翠

含みつる小朝のる原とて 野坡

旅之部 含みつる小朝のる原とて 支考

送別 名縁七年のまをて 芭蕉

妻あつた 雁のえ世のふれは 荷兮

あつたや柿くひふとてハ 惟然

許六くあつたれとてハ 芭蕉

旅人の心も何とてハ 芭蕉

留別 旅の惟然つる宅より古今ふゆり 芭蕉

嵐とてあつたの草とてハ 大草

續接

新の子のあつゝあつ返つるあか 芭蕉

甲斐のこのあつゝ清なる付

うらたの山まふかゝり

あつゝて牛山のうらた著の路 木節

縮委や浮世とあつゝる 於藤山 越人

あつゝあつゝいゝの 操や穂の香 野徑

出羽のあつゝあつゝいゝとあつゝ

のうらたとあつゝ

あつゝいゝあつゝあつゝいゝあつゝ 公羽

十あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ 許六

大あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ 全

くゆの路

あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ 曾良

あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ 猿 我 峯 史 邦

あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ 史 邦

田園のあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ

又あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ 呂 九

我蒲園いゝいゝいゝいゝいゝいゝ 沾 圃

常陸の園いゝいゝいゝいゝいゝいゝ

あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ

縁もあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ 支 考

あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ 全

え縁と年のあつゝあつゝあつゝあつゝ

より武にあつゝあつゝあつゝあつゝ

驛あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ 芭 蕉

